

## 犯罪被害者の状況と支援

犯罪被害者（直接被害を受けた人、その家族、遺族）事件直後の状況としては、突然の出来事を現実として受け止められず、何も対処できない状態となります。頭の中が真っ白になり、何も考えられず、周りのことが目に入らなくなります。また、事件の時の状況などが思い出せなくなり、気持ちがどんどん沈んでいきます。

被害直後のショックが落ち着いた後でも、精神的不調、身体的な不調は続きます。精神的には、事件のことが突然頭の中によみがえるフラッシュバックなどにより苦しみます。また、身体的には、不眠や頭痛、嘔吐など、女性であれば、生理不順にも悩まされます。非常にストレスのかかった状態が継続していきます。

その他にも治療や通院、捜査や公判手続きのための欠勤などから、職場との関係がうまくいかなることもあります。また、自宅が事件現場となって

しまった場合などは、再被害の恐れや、近隣のうわさによる精神的苦痛、捜査などにより転居を余儀なくされることもあります。それらにより、まともに働けず、経済的な問題にも陥ってしまいます。

このように、犯罪被害者は心身ともに傷を負います。仮に身体の傷が癒えても、心の傷はなかなか癒えません。そのようなときに、事件の話聞き出す、自身の価値観を押し付けるような励ましや被害者の非難は絶対にしないでください。そういった行動は、被害者を一層傷つけかねません。ぜひ、そばに寄り添い、感情を受け止めてあげてください。そのことが、犯罪被害者の支援に繋がります。



## 「女子大のとびら」

群馬県立女子大学 ☎65-8511

### 映画と地域文化

県立女子大学文学部には国文学科、英米文化学科、美学美術史学科、総合教養学科の4つの学科があり、私は英米文化学科に所属しています。英米文化学科は、その名のとおり、英語と英米の文学・文化全般を学ぶことをとおして、幅広いものごとについて論理的に考える力や、社会のさまざまな問題を解決する能力を培うことを目指す学科です。

その学びの一端として私が担当しているのは、アメリカ文化や映像文化です。なかでも、私の専門の一つはアメリカを中心とした映画で、これまで本学の公開講座でも、今話題のアメリカ大統領やシェイクスピア、それから源氏物語などについて、映画での描かれ方をお話してきましたので、そこで会った人もいないかもしれません。

玉村町は映画の好きな人が非常に多いところで、しかも単に観るだけでなく、町をあげて撮影にも協力するというところが大変素晴らしいと感じています。本学もそれに協力させていただいており、2014年の全編玉村町ロケの『漂泊』（藤橋誠監督）では、本学の学生が主演を務めたほか、ロケ地およびエキ

文学部英米文化学科准教授 木下 耕介  
ストラ提供でも協力しました。『お盆の弟』（2015年、大崎章監督）も玉村ロケがありましたが、こちらにも本学の新井小枝子先生が方言指導で関わっていました。こういった力強い「映画文化」の発展に私も微力ながら貢献したいと考え、昨年より玉村ブックセンターさんのご協力でレンタルDVDのセレクトのコーナー（不定期更新）を設けていただきました。知っている人もいないかもしれませんが、特定のテーマに沿って20本くらいの作品をセレクトしておすすめしてきました。

さらに1月末には、教養教育科目「アメリカ現代史」の授業の一環として、現代アメリカについてのドキュメンタリー映画の上映会を企画しています（詳しくは大学ホームページをご覧ください）。上映予定作品は、若い学生たちには少し厳しい現実を垣間見るものになるかもしれませんが、社会の難問に立ち向かう力を与えてくれるポジティブな作品にするつもりです。興味のある人はぜひご参加ください。

これからも、専門領域をとおして地域文化の発展に貢献していきたいと思っています。